
淡水カメ保護研究施設「亀楽園(きらくえん)」オープン

谷口真理・亀崎直樹

‘Kirakuen’ turtle keeping terrarium established in the Kobe- Suma Aqua
life Park

By Mari Taniguchi and Naoki Kamezaki

日本の本州、四国、九州にはニホンイシガメ(以下、イシガメ)、クサガメ、スッポン等が生息しているが、近年、北アメリカに産するミシシッピアカミミガメ(以下、アカミミガメ)が日本の河川や湖沼に侵入し、広く定着・繁殖しているとされ、さらに在来のカメの生存を脅かしているとさえ言われている。子ガメの時期にはミドリガメと呼ばれるアカミミガメは、ペットショップで安く販売されたり、まつりのカメすくいゲームの景品となるなど、容易にしかも安価で手に入るカメである。外来種であるアカミミガメが日本に侵入し始めておよそ 50 年。この間に日本の河川や湖沼はアカミミガメだらけとなった。淡水生物に興味のある人々の間には、日本の河川や湖沼はもはやアカミミガメだらけだとの考えが既に広まっている。しかし、一方でアカミミガメがなぜ日本に生息しては駄目なのか、別にイシガメがアカミミガメに置き換わってもいいのではないかという人も大勢いる。

日本でアカミミガメが急速に増加した理由を我々は次のように考えている。

アカミミガメの原産国である北アメリカには、カメを捕食するミシシッピワニが生息し、それがアカミミガメの数を抑えている。ところが、日本にワニのような強力なカメの捕食者はいない。その結果、アカミミガメは増える。また、アカミミガメはワニの捕食に対する戦略をとる必要がある。その結果、アカミミガメの性格は荒くなり、体も大きく、一回に産む卵の数も多くなったと考えられる。成長したアカミミガメを手にしたことのある人は、口を開けて威嚇してくる姿をみたことがあるだろう。一方、日本にはワニのような捕食者がいないため、そこに生息するイシガメの性格はおとなしく、繁殖能力もアカミミガメに比べると低いと考えられる。つまり、北アメリカの淡水の生態系は、ワニなどの強力な捕食者に対する戦略を獲得した生物によって構成され、全体的に乱暴な生物が多くなる。それに対し、強力な捕食者のいない日本の淡水生態系は、穏やかな生物で構成される傾向がある。北アメリカのブラックバス、ガー、ブルーギルに対し、日本のフナ、タナゴ、ナマズなどをみてもわかるような気がする。日本のようにのどかな生態系に、厳しくやや乱暴な環境に適応したアカミミガメが侵入した場合、急速にそれらが増殖するのは当然の結果といえる。繁殖能力の高いアカミミガメと低いイシガメが共に生存していると、たとえ競争しなくてもアカミミガメの割合がどんどん増加することになる。今後このままアカミミガメを放置し続ければ、ますます分布が拡大し、日本固有のやさしい生態系は倒壊すると考えている。つまり、長い年月をかけて培われてきた日本固有の生態系を保全するという観点から、

アカミミガメの駆除は必要なのである。

それでも、イシガメがアカミミガメになっても同じカメなんだからいいのではという人の意見を聞くことがある。しかしである。もし、京都の町並が海外系の店舗で埋め尽くされてしまったら、日本人はどう考えるだろう。おそらく抵抗感を覚えるに違いない。日本固有の生態系も、京都の町並と同じ、長い歴史が築いた文化のようなものだと考えるべきだと思うのである。

神戸市立須磨海浜水族園では、日本固有の生態系保全の観点から、外来種アカミミガメ駆除に対する社会的合意形成を促したいと考えている。このような考えの下、当園では、2010年8月7日に淡水カメ保護研究施設「亀楽園(きらく)」をオープンした(写真)。主な目的は以下の3つである。

1. 野外で捕獲された外来種アカミミガメの収容施設

アカミミガメの駆除において、その方法を確立し、駆除の効果を検証することに加えて、捕獲したアカミミガメの処分は重要な問題である。駆除後のカメを殺処分することには多くの市民が抵抗感を持っている。亀楽園の目的の一つは、捕獲されたアカミミガメを収容し飼育することで、市民が抵抗なくアカミミガメを駆除できる環境をつくることにある。確かに、駆除したアカミミガメを無制限に収容するわけ



写真 淡水カメ保護研究施設「亀楽園」

にはいかないが、殺すことなくどこかに閉じこめて駆除する社会的な流れを醸成したいと考えている。

2. アカミミガメ駆除のための基礎研究

アカミミガメは本来、北アメリカに分布するが、日本に侵入し定着した本種が、どのような生態を有しているかはほとんど研究されていない。そこで、本施設において、アカミミガメの生態、特に繁殖に関する研究を実施したい。また、アカミミガメの不妊化に関する研究も行う予定である。

3. イシガメの保全に関する研究—イシガメにやさしい河川改修を目指して—

ニホンイシガメは日本にしか生息しない日本固有種である。イシガメの生息環境である山間部とその周辺の河川や湖沼の自然は破壊され、本種が繁殖できる環境は著しく減少していると考えられる。そこで、イシガメが繁殖できる条件、特に河川改修などにおいて破壊される生育条件などを明らかにし、その改善方法を明らかにしたいと考えている。最終的にはイシガメの繁殖が可能な河川改修方法を提案する予定である。